

琵琶湖での外来魚駆除の現状と対策、新たに確認された外来魚とその傾向

滋賀県農政水産部水産課 大山明彦

(外来魚駆除の現状と対策)

滋賀県において、ブルーギルは昭和 40 年頃、オオクチバスは昭和 49 年に初めて確認されました。以降、オオクチバスは昭和 58 年に、ブルーギルは平成 5 年に大増殖し今日に至っています。

滋賀県では、昭和 60 年度から外来魚駆除事業を開始しました。平成 14 年度からはその取組を強化し、それまで年間の駆除量が多いときでも 280 トン程度であったものが、平成 14 年度以降は 400 トンから 500 トン程度にまで増加しました。今年度は 11 月末現在で 470 トン駆除されています。一方、外来魚の推定生息量は、平成 16 年春に 1,900 トンであったものが、平成 17 年春には 1,800 トン、平成 18 年春には 1,700 トン、平成 19 年春には 1,600 トンとなり、徐々にではありますが減少しつつあります。また、スジエビの漁獲量は駆除を強化する直前の平成 13 年には 173t であったものが、平成 17 年度には 290t にまで増加しました。ボテジャコやホンモロコが増えてきた、との声も聞こえるようになってきており、外来魚駆除の効果が見えつつあります。今後も駆除の手をゆるめることなく、外来魚駆除を進めていきたいと思えます。

(新たな外来魚とその傾向)

水産試験場では 1994 年以降、オオクチバスやブルーギルのように琵琶湖等への定着が確認されているもの以外に、32 種 102 尾の外来魚を漁業者からの通報等により確認しました。それらが捕獲された背景を考えると、観賞魚が遺棄される場合、定着など何らかの目的を持って密放流される場合とに大別されます。水産試験場が確認した外来魚のうち、56% の魚種は熱帯や亜熱帯域原産であり、これらは日本国内で観賞用として流通しています。したがって、これらの魚は観賞用として飼育されていたものが、飼い主の都合により遺棄されたものと思われ、冬季の低水温によりすべて死滅するものと考えられます。

しかし、同じく観賞用に流通しているガー類のような温帯域原産の魚類は、侵入後少なくとも生存は可能であると思われ、オオクチバスのように琵琶湖等で爆発的に繁殖する可能性もあります。

一方、釣りの対象として人気のあるコクチバスが発見される事例は、琵琶湖等での定着を狙った悪質かつ意図的な放流が行われた結果であると思われ、またピラニアのように、愉快犯的な意図が疑われるような事例もあります。いずれの場合においても、捕獲された外来魚たちは、人の身勝手さの象徴ともいえるのではないのでしょうか。

このような外来魚の放流は、固有の生物相に取り返しのつかない悪影響を与える危険性もあることから、滋賀県漁業調整規則によって禁止されており、違反者は処罰の対象となります。琵琶湖など天然水域へ外来魚の放流は絶対に行わないようにお願いします。